



VILLAGE Historia

～東秩父村にかかわる歴史をマルッと紹介～

今回ご紹介するのは「原始」の東秩父です。日本の原始時代は「旧石器時代」と「縄文時代」に区別され、今から約3万5000年前から3万年前の旧石器時代の遺跡が周辺地域で発見されています。そして、村内で発見された最古の石器は縄文時代のものでした。そこから推察すると、約1万2000年前の縄文時代から東秩父に文化が築かれていたのではないかと考えられます。

東秩父村白石地内萩殿で「神子柴型石器」という旧石器時代から縄文時代への転換期に使用されていた、立木を切り倒す斧の役割をしていたと考えられる石器が発見されています。これが出土したことにより、東秩父の地にも縄文人の到来があったと確認されました。

東秩父で最古の遺跡は、今から約8000年前の縄文時代早期、御堂地内の「清正公山山頂遺跡」であり、キャンプ地として使用されていた形跡が残っています。また、土器片が数点確認されました。

そして、今から約6000年前の縄文時代前期、地球は温暖化が最も進み、標高1000mの山々はドングリなどの豊かな実りの落葉広葉樹で覆われていたといえます。海も水面が高くなっていました。さすがに海から遠く離れた東秩父の地までは海水は来ておらず、食文化は川の幸と山の幸で支

えられていたと考えられます。東秩父で居住していた遺跡が発見されたのもこの頃からとなっています。

約5000年前の縄文時代中期には、地球温暖化は落ち着き、安定した気候となりました。東秩父に存在する、この時代の遺跡から、本村にも集落が存在した形跡が見つかっています。

縄文時代後期および晩期のもので、本村には奥沢地区に「関場遺跡」という「石器作りのムラ」を象徴する遺跡が存在します。後期、地球の温暖化が下降し、寒冷化により針葉樹林の多くなった東秩父の地は人たちの食料事情を悪化させていきました。そこで人たちは、生活の回復を祈る「呪術性」の高い産物を製作しだします。祈りの道具として「石剣・石棒」はその代表で、関場遺跡ではそれらを製作する「石器工房」があったとされています。遺跡からは、製作工程途中のものも見つかり、石剣・石棒の製作遺跡が全国で数例しか報告がないことから、この遺跡の発見は製造工程を解明するうえで極めて重要なものでした。そして、関場遺跡で製作された石剣・石棒の供給範囲を解明することは、縄文社会の広域交流を知るカギになるものであると大変重要視されました。



右の写真は関場遺跡で発見された石剣・石棒の一部です。また、上の写真は、これらを製造していた関場遺跡の一部です。現在は「和紙の産地」として有名な村が、はるか昔は「石器作り」のムラとして有名だったかもしれないと考え、歴史というのとはとても感慨深いものだと思います。

次回は弥生時代から出発です！